

「腹部 CT スキャンの読み方」第2版

聖母病院・放射線科部長 平松 慶博
東京女子医科大学講師・放射線科 河野 敦 著
筑波大学講師・放射線科 黒崎 喜久
筑波大学講師・放射線科 齋田 幸久

筑波大学教授

岩 崎 洋 治

本書は、平松慶博氏が7年前に出版された「腹部 CT スキャンの読み方」の内容を全面改訂して、腹部 CT 画像を撮る人、読影する人のために、必要な知識と技術を、画像を用いて解説した、非常にわかりやすいアトラスである。一読しての感想は、なにか豊かになったような満足感を覚えたことである。

平松氏をはじめとする著者の方々が、多年にわたる X 線診断や血管造影の豊富な経験を CT 検査に活かしながら、より鮮明な CT 像を得るために、日夜重ねられた努力の結晶と云うべき書である。

本書の1つの重要な骨格は、腹部の正常臓器や組織を、CT で輪切りにしながら、正常組織の CT 像を、CT 解剖と名付けて、丹念に編集したことであろう。例えば肝臓の項では、16葉の単純または造影 CT 像を用いて、肝臓内の血管系はもとより

のこと、周辺の血管系、腸管、脾、腎、副腎などの断面を明示している。それらの画像を例にとりながら、正常組織の CT 像や、それらを鮮明に書き出す方法が、簡潔に説明されている。本書の第2の柱は、多くの症例から厳選された各種疾患の CT 像である。腹部疾患のほとんどすべてを網羅した CT 画像には、その撮影方法や読影のコツが付記されている。

有難いことに、肝、脾、腎、脾、副腎、子宮のみならず、胆道、消化管、骨盤腔、後腹膜、腹壁の CT 像に関しても要点がまとめられている。したがって癌の浸潤範囲やリンパ節転移など、ある疾患の後腹膜腔や他組織への波及の有無を読むうえで、大変参考になる。

CT に限らず、どの画像診断でも、“何を目的としてその画像が撮られたか”、“その診断目的に適した

方法で検査が行われたか”、“得られた画像はその目的にかなったものかどうか”、“アーティファクトによる画像の乱れはないか”、“その画像から何が診断できるか”、1枚 CT 像を撮影または読影するときに、これらのことを念頭に置いている人と、なんとなくしに眺めてわかったかのように錯覚している人がある。前者は専門家（医師）に属する群で、後者は素人の群である。本書を読む機会を得て、はじめて専門家群の長い列の1番後ろに、並ぶことができたような喜びを味わっている。

十数年にわたる著者らの執念の結実とも言える豊富なそして見事な画像とその解説も、目を通すだけならば、1晩で読み終えることができる。しかし1枚1枚の画像に託す著者らの真意を理解するには、それ相応の年月と経験が必要なのであろう。

超音波診断や CT になじみの少ない医師も多いことと思われる。しかし好むと好まざるとにかかわらず、その読影に関する基本的知識は身につける必要がある。私と同年代の医師の方々をはじめ、これから医師になる人も含めて、CT の基本を理解するには絶好の指導書としてお薦めしたい。

B5判 276頁 図34 写真416

色図1 1986 ¥7,200 円300

医学書院 刊